

Title	[研究ノート] 竹富町鳩間島における島民意識と観光の特色
Author(s)	堀本, 雅章
Citation	沖縄地理(13): 49-60
Issue Date	2013/6/25
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/17804
Rights	沖縄地理学会

竹富町鳩間島における島民意識と観光の特色

堀本雅章

(法政大学沖縄文化研究所)

Islanders' Perception and Observed Characteristics of Sightseeing Activities in Hatoma Island, Taketomi Town

Masaaki HORIMOTO

(Institute of Okinawa Studies, Hosei University)

摘 要

鳩間島は西表島の北に位置する島である。過疎化による廃校を阻止するため、海浜留学という形で、全国各地から子どもを受け入れてきた。海浜留学生として、都会から鳩間島へやって来た少女を主人公にしたドラマ「瑠璃の島」の放映後、観光客が急増した。高速船が運航開始し、民宿が10軒に増え、急激に観光地化した。鳩間島の観光の特色について調査を行った結果、リピーターが多く、ほとんどが県外からの観光客で、1人旅や30歳代の人が多い。鳩間島での過ごし方は、海で遊ぶ、散策、サイクリング、芝生で昼寝、鳩間中森見学、などである。遠隔地で船の欠航が多いにもかかわらず、鳩間島が観光地化したのは豊かな自然とのんびりと過ごすことができるからである。また、鳩間島民や旅人との触れ合いも、鳩間島の大切な観光のあり方と言える。

キーワード：島民意識、観光、観光資源、入域観光客数、鳩間島、瑠璃の島

Key Words: islanders' perception, sightseeing, tourism resources, number of visitors, Hatoma island, Ruri no shima

I はじめに

沖縄県八重山郡竹富町にある鳩間島は、西表島の北約5.4kmに位置する人口約50人の島である(図1)。その小さな島に2012年8月現在、宿泊施設(コテージタイプのペンションやドミトリーもあるが、概ね民宿タイプのため以下、民宿とする)が10軒ある。名所旧跡は少ないながら、2000年代前半から入域観光客数が増加傾向にある。2006年には石垣島からの高速船が運航を開始した。現在ある10軒の民宿のうち6軒までが2006年以降に開業した。特に、2000年代後半から、観光と無縁の島に急激な変化が訪れた。その背景には、2005年4月から6月にかけてテレビ放映された「瑠璃の島」の影響が大きいと思われる。

瑠璃の島が放映されるきっかけとなったのは、

鳩間島の過疎化による廃校の危機が挙げられる。鳩間中学校は、1974年度から10年間廃校となり、小学校も過去3度廃校の危機に陥った¹⁾。過疎地域で学校がなくなると、集落の活動が消滅し生活が成り立たなくなることがある。鳩間島では、過疎化による廃校が引き起こす地域社会の崩壊を阻止するため、「山村留学」に類似した「海浜留学」という形で、全国各地から子どもを受け入れている。島民の家庭から鳩間小中学校へ通う子どもがおり、彼らを海浜留学生と言う²⁾。海浜留学生として、都会から鳩間島へやって来た少女を主人公にしたドラマ「瑠璃の島」の放映後、観光客が急増したのである。

しかし、テレビ放映の影響だけであれば、放映直後に一時的に観光客が急増し、その後減少するはずである。2009年から2011年に限れば、鳩間

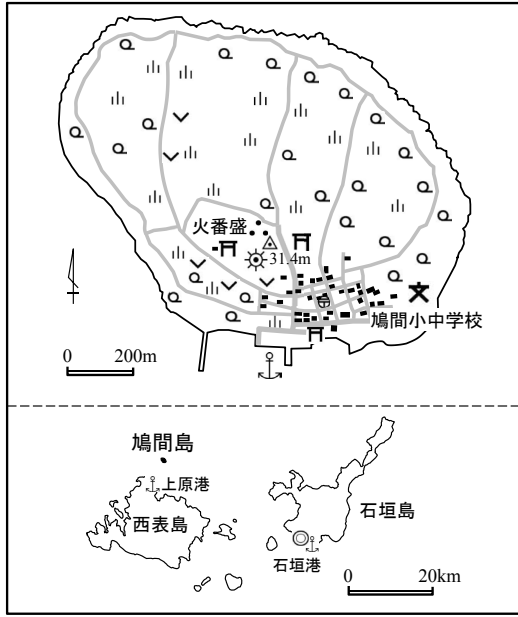
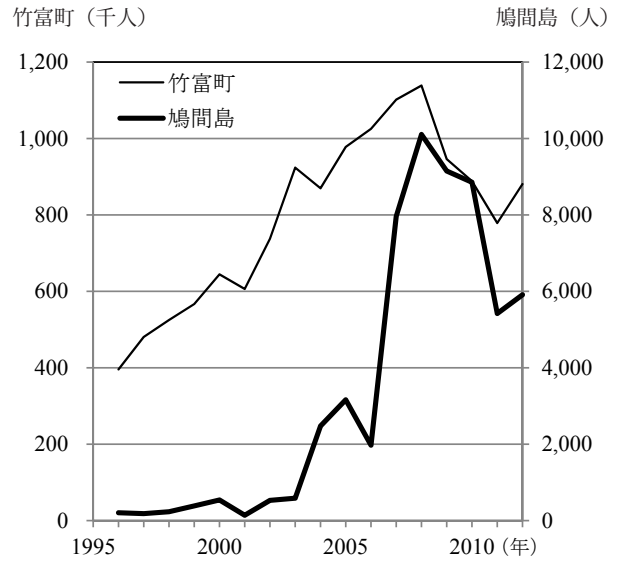


図1 研究対象地域

図2 入域観光客数
(竹富町ホームページに基づき筆者作成)。

島だけでなく鳩間島がある沖縄県竹富町全体でも、入域観光客数は減少したが、経済不況の影響が大きな要因と考えられる(図2)。2012年はわずかではあるが、鳩間島および竹富町全体でも入域観光客数は再び増加しているが、同年格安航空会社の設立が続いたことの影響が考えられる。さらに、2013年1月から5月における鳩間島の入域観光客数は、2012年の同時期2,228人であったのに対し、2,614人まで増加している。これらのように、景気の変動、交通網の整備、旅行費用の変動、天候、連休などの暦の変化など、多くの要因により入域観光客数は変動するが、2005年以降の鳩間島の急激な観光地化には、特別な背景があり、解明する必要があると考えた。

鳩間島を含め、沖縄県全体で入域観光客数が増加傾向にあるが、沖縄県全体の好イメージや文化遺産、豊かな自然などがより一層注目されていることによる。伊波(2008)は、芸能界やスポーツ界での沖縄出身者の若い人たちの活躍が大きく寄与し、沖縄観光の土台となるイメージを作り、さらに首里城が復元され、他の琉球王朝時代の遺跡などと併せて世界文化遺産に指定されたことは、観光地としてのイメージアップになったと指摘している。花井(2007)は、近世まで独自の歴史やそれを通じて育まれた文化は、他にはない歴史、

文化並びに自然をこの地域にもたらしたと述べている。さらに、梅村(2007)は、県外観光客に関しては、観光地としての沖縄県は十分に絶対優位性を持っていると考えられるが、現状では美しい海が最大の観光資源であると指摘している。これらのように、沖縄観光全体の魅力が増していることも要因としてあげられる。

また、島嶼における観光に関する研究として、保母(1996)は、島嶼では自立的発展の源となる産業の選択肢は決して多くない中で、観光を地域の自立の手段とする島嶼は少なくないと指摘している。海津・真板(2006)は、沖縄県南大東島における「島まるごとミュージアム事業」を通じて、住民参加による自立的観光を通じた地域の活性化を取り挙げている。これらのように、島嶼に関する研究はあるものの、鳩間島の観光を取り挙げた研究は見受けられない。

ところで、観光客を引き付けるためには、観光資源が必要である。観光資源について、山村(2012)は、山岳・海岸・植生・温泉などの自然観光資源、史跡・歴史的町並み、農山漁村や都市の景観、祭り・伝統芸能などの人文観光資源に大別されると指摘している。この分類によると、鳩間島は自然観光資源に加え、豊年祭、結願祭、鳩間島音楽祭をはじめとする祭りや伝統芸能などの人文観光資源も

有している。また、花井（2008）によると、ニューツーリズムが台頭し、その一つに「文化観光」があり、旅行先の歴史や伝統文化、風習など文化的要素について旅行者が探究心を満たすことを目的とし、異なる文化の相互理解につながることに大きな意義があると指摘し、鳩間島の祭はこれに含まれると思われる。また、須田（2009）は観光資源には自然景観、文化財等歴史的文化的価値のあるもので、さらにそれらの複合体、集合体を含む幅広いものが考えられると述べている。

鳩間島を訪問するには、石垣島を経由する必要があるが、石垣島のほかに、竹富島、西表島、黒島、波照間島などほかの八重山の離島へも立ち寄る人も多い³⁾。鳩間島への来訪者は、鳩間島を第一の目的地とする人、八重山へ行く際に鳩間島を含めた複数の島を訪れる人、その他に波照間島行き船が欠航し、急遽鳩間島を訪れる人もいた⁴⁾。これらのように、八重山諸島には観光地化した多くの島があるため相乗効果により、入域観光客数がより多くなると思われる。

本研究では、鳩間島が急激に観光地化した要因と、鳩間島の観光の特色について取り上げる。本稿では、鳩間島民を対象に島の将来（もっと発展すべきか否か）、島の自然を保つためには何か必要か否かについての島民意識を取り上げ、観光関連の業務に就く者とそれ以外の者とを比較した上で、鳩間島の観光の魅力、鳩間島を訪れる観光客の特徴、観光地としての名所旧跡が少ないにもかかわらず、観光客が急増した要因などを解明することを本研究の目的とする。調査は、2010年9月に実施した全成人を対象とした島民意識の調査および2012年8月に行った島内全ての民宿のオーナーへの聞き取りに基づき分析する。

II 調査方法と質問項目

調査は、2010年9月に鳩間島居住の全成人を対象に、島の将来（もっと発展すべきか否か）、島の自然を保つためには何が必要か否か、必要な場合はその方法について質問を行い、対象者41人中31人から回答を得た。調査方法は対面調査または、後日調査票を回収する方法のうち、回答者が選択した。次に、鳩間島の観光の特色を考察するために、

島内の民宿のオーナーを対象に、2012年8月中旬から下旬に調査を実施し、10軒全てから回答を得た。そこでは、鳩間島の宿泊客の特色や、鳩間島の観光に関する聞き取りを行った。民宿のオーナーに観光客の傾向を聞くことは、オーナーの主観が入る可能性があるが、観光客全員に対してアンケートなどを行うことは不可能なので、本稿ではこの点を十分留意したうえでオーナーへの聞き取り結果を利用することにした。

調査は、回答者の属性に関すること以外に、営業開始年、収容人数、性別・年代別宿泊客の特徴、県外からの宿泊客の割合、1人で訪れる客の割合、リピーター率、観光客が増加した時期、「瑠璃の島」放映による観光への影響、宿泊客が多い時期、鳩間島の観光の特色、鳩間島の観光と今後についてである。なお、オーナーの出身地は、島内出身6人、島外出身4人である。後者の中には配偶者が島内出身者のケースも多く、島内の事情にも詳しいと考えられる。

III 研究地域の概況

1. 鳩間島の概要

鳩間島の世帯と人口は、2010年国勢調査結果によると26世帯43人（男26人、女17人）である。戦前の鰹漁の盛んな頃は、島の南側の1カ所の狭い集落に数百人が暮らしていた⁵⁾。鳩間島の人口推移は、1949年に700余人でピークとなり⁶⁾、その後は減少を続けていく。本土復帰から2年後の1974年春には21人にまで減少し、この段階で島民は廃村を現実のものとして意識するようになった⁷⁾。

戦後の人口減少の要因は、大型台風や干ばつなどの自然災害の影響を受けたこと⁸⁾、水道が1980年まで引かれず、電気は1983年まで制限給電であるなど日常生活が不便であったこと、1960年代初期から日本本土が高度経済成長期を迎え、労働力の需要が増えたために、若年層に加えて壮年層までもが島を離れ、挙家離村したことなどである。2001年以降、居住者数は一旦増加に転じたが、その後島外からの移住者が、相次いで転出したことが大きく影響して激減し、2010年9月の調査時点では居住者は47人であった。しかし、2012年8月の調査当時は居住者53人となり、子どもを連れて

鳩間小中学校へ赴任する教職員が増えたこともあり多少増加している⁹⁾。

島の主産業であった鰹漁業が1960年代頃からの不振により、経済活動が停滞していた時期があった。現在は観光が島の主産業となっている。高台にある鳩間中森は島内の数少ない名所で、灯台と遠見台がある。そのすぐ近くにある祭事が行われる友利御嶽をはじめ、島内には多くの御嶽がある。

鳩間島は音楽や芸能活動が盛んで、沖縄民謡「鳩間節」はこの島から生まれた。同じく沖縄民謡「芭蕉布」の作詞者・吉川安一も鳩間島出身で、島内にも民謡歌手が数名居住している。毎年5月3日に開催される鳩間島音楽祭には約1,000人が参加し、さらに9月にも100人規模の音楽祭が行われている。また、島では伝統行事である豊年祭や結願祭が行われるほか、8月10日を読み方にちなんで「ハトマの日」とするなど、島をあげての行事が活発に行われている。

1980年代後半頃から公共工事が盛んになり、島内に様々なインフラが整備されていく。1988年には老朽化した公民館に代わり鳩間コミュニティーセンターが新築された。1997年には島内一周道路が完成し、徒歩1時間弱で島を回ることができるようになった。この他、道路の舗装、栈橋の拡張、定期船が横付けできる埠頭や防波堤が整備された。2000年代後半以降も各種施設の整備が顕著で、焼却炉、生ゴミ処理機、潮の満ち引きに影響されることなく船の乗り降りが容易にできる浮き栈橋、港の待合所などが整備され、生活面や環境面が著しく改善された。一方、島内には、診療所、交番、消防署などはなく、鳩間コミュニティーセンター（鳩間公民館）は島民による自主運営で、公的施設は小中学校のみである。

2. 鳩間島の入域観光客数の推移

竹富町全体の年間入域観光客数は1996年から2012年の間に、395,592人から880,715人となり約2.2倍の増加に対し、鳩間島の年間入域観光客数は206人から5,911人となり約28.7倍にまで増加している（図2）。さらにダイビングなどのチャーター船による来島者は把握できないことから、統計よりも実数ははるかに多いとみられる。

長らく石垣島から鳩間島まで週3便の貨客船しかなかった船便が、島民の行政への陳情に加え、観光客の増加により、2006年4月から高速船の運航が開始された。季節により便数は異なるが、2013年7月1日現在で船会社3社合わせて高速船が石垣港から1日3便、フェリーは日曜日を除き1日1便運航されている。高速船では石垣島から約50分で鳩間島まで行くことができるため、日帰り観光も可能となった。交通アクセスの改善により観光客が増え、その結果船の便数の増加につながっていく。交通網の整備と観光客の増加は深い関係があると言える。また、2000年に3軒だった民宿（そのうち1軒は現在第三者に譲渡されている）も現在、素泊まり民宿を含め10軒に増えた¹⁰⁾。2006年には食堂が開店し、雑貨店の営業時間も長くなり、観光客の受け入れ体制が整備されたことが、入域観光客数が増加した一要因と考えられる。

IV 島の将来や自然保護に関する島民意識

本章では、2010年9月に鳩間島の全成人を対象に島の将来や自然保護に関する島民意識を調査した。その結果を観光産業に従事している島民とそれ以外の島民とに属性区分して、両者を比較し、違いの有無およびその要因について考察する。

1. 島の将来について

島の将来について質問を行った。その結果、「もっと発展するべき」13人、「今のままでよい」8人、「昔に戻って欲しい」5人、「無回答」5人である（表1）。これらを、観光客の利用の多い仕事に就く者（民宿、食堂・喫茶、マリ産業、売店）を「観光関連就業者」とし、「その他の島民」とに区分して比較を行った。前者は、該当者20人中、回答者は18人で、後者は、該当者11人中、回答者は8人であった。観光関連就業者の回答として、「もっと発展するべき」が11人、「今のままでよい」が3人、「昔に戻って欲しい」が4人、無回答が2人であった。一方、その他の島民の回答は、「もっと発展するべき」が2人、「今のままでよい」が5人、「昔に戻って欲しい」が1人、無回答が3人である。これらのように、鳩間島の発展を望むか否かについては、島民の意見は二分している。観光関連就業者はもっと発展を望む者

表1 島の将来

	もっと発展 するべき	今のままで よい	昔に戻って 欲しい	無回答	計
観光関連就業者	11	3	4	2	20
その他の島民	2	5	1	3	11
計	13	8	5	5	31

(筆者調査により作成)。

が多く、その他の島民は、発展より今のままでよいとの回答の方が多い。ただし、観光関連就業者全てが発展を望んでいる訳ではなく、「今のままでよい」との回答もみられる。

両者合わせて13名いる「もっと発展するべき」の内訳は、「人口の増加」が4人、「発展・活性化」、「節度のある発展」、「仕事」、「出身者の帰島」が各2人、「学校がなくても、島は残るし発展もするだろう」、「このままでは終わってしまう」、「全ての面においてよいから」が各1人である(複数回答有)。「もっと発展するべき」と回答した内訳に、「節度のある発展」との回答があるように、観光地化しさえすればよいと考えている訳ではない。「もっと発展するべき」の内訳について属性により比較すると、観光関連就業者11人、その他の島民2人で、回答者数が少ないにもかかわらず、「節度のある発展」と回答したのは、その他の島民である。

次に、「今のままでよい」の内訳は、「恵まれた自然を守るため」、「鳩間島の昔の姿を維持したい」が各2人、「歴史、文化を維持するため」、「これ以上の観光地化を望まない」、「今の状況で生活ができる」が各1人である。その他に「発展は困難である」が2人である(複数回答有)。属性により比較すると、今のままでよいとの回答者は、観光関連就業者3人、その他の島民5人で、回答者数が少ないにもかかわらず、その他の島民はこれ以上の発展を望まず、今のままでよいとの意見が多い。入域観光客数の増加により、船便の本数の増加や売店の長時間営業などのメリットはあっても、その他の島民は、観光地化による経済的な恩恵はあまりなく、環境の悪化からこれ以上の発展を望まない、また前述のとおり節度のある発展を望む者が多いことが分かった。

さらに、「昔に戻って欲しい」の内訳は、まず何

年位前に戻って欲しいかとの質問に対し、「30年前」が2人、「20年前」、「10年前」、「5～6年前」が各1人である。次に、昔に戻って欲しい理由については、「昔は話し合いやユイマールがあった・皆仲がよかった」が4人、「一定数以上の居住者がいた」、「いなからしさ・素朴さがあった」が各2人、「ルールづくりが今は必要」、「ヤシガニ保護条例や国立公園の編入について検討が必要」、「きびしい移住希望者の選定が必要」が各1人である(複数回答有)。

属性により比較すると、「昔に戻って欲しい」との回答者は、観光関連就業者4人、その他の島民1人である。内訳について属性により比較すると、観光関連就業者は、昔のよさを指摘しているのに対し、その他の島民のみ、「ルールづくりが今は必要」、「ヤシガニ保護条例や国立公園の編入について検討が必要」、「きびしい移住希望者の選定が必要」のように、今後必要なことを具体的に提示しているところが大きく異なる。

2. 島の自然を保つための方法

「島の自然を保つためには何か必要でしょうか。特に何も必要ないでしょうか。」の質問を行った結果、30人から複数回答を得た(観光関連就業者21人、その他の島民9人)。それによると、「このままでよい・何もしない」が7人、「自然保護に対する心がけ・感謝の気持ちを持つ」が6人、「清掃する」が4人、「汚さないこと」が3人、「生物をむやみに取らない」、「環境を悪化させる島外の業者の改善」、「何かしなければいけない」が各2人、「花を植える」、「行政の自覚」、「若い人の力」、「開発を行わない」が各1人である(表2)。多くは何かを行うというよりも、「自然保護に対する心がけ・感謝の気持ちを持つ」、「汚さないこと」、「生物をむ

表2 島の自然を保つための方法

	このまま でよい ・何もし ない	自然保護 に対する 心がけ ・感謝の 気持ちを持 つ	清掃する	汚さない こと	生物をむ やみに取 らない	環境を悪 化させる 島外の業 者の改善	何かしな ければい けない	その他	計
観光関連就業者	6	3	3	2	2	1	2	2	21
その他の島民	1	3	1	1	0	1	0	2	9
計	7	6	4	3	2	2	2	4	30

(筆者調査により作成)。

やみに取らない」のように、自然保護に対する意識の持ち方を指摘している。「環境を悪化させる島外の業者の改善」については、現状では規制は困難である。現在、鳩間憲章を制定し、観光客への周知を行っているが、さらに注意事項をアピールしていく必要がある。また、ゴミの持ち帰り運動の徹底が必要であると思われる。なお、属性比較を行ったが、大きな差異はみられなかった。すなわち、観光産業への就業状況にかかわらず、島の自然を保つためには、清掃も必要だが、心がけが最も大切であると島民は共通して考えていることが分かった。

V 鳩間島の観光形態とその特徴

本章では鳩間島の観光形態とその特徴について、民宿のオーナーからの回答に基づき、項目ごとに集計し、考察する。なお、項目は大きく民宿の営業形態、宿泊客の特徴、観光客の動向、観光の特徴と将来展望の4つに分類を行った。以下、それぞれの結果を表3をもとに報告する。

1. 民宿の営業形態

1) 営業開始年

営業開始年については、老舗の2軒以外は、2000年頃の離島ブームが始まった後に営業を開始している(表3)。特に、「瑠璃の島」放映後の2005年以降に限っても、6軒が営業開始している。入域観光客数の増加に対し、民宿の開業や増築を行っており、鳩間島全体での収容人数は増加しているものの、急激な観光地化には対応しているとは言えない状況にある(図3)。

2) 収容人数

収容人数については、鳩間島全体の宿泊収容人数は151人である(表3)。最も収容人数の多い民宿で35人、最小は5人であり、平均は15.1人である。人口50余人の島に民宿が10軒あり、全て家族または1人で営業している小規模な民宿ばかりである。特に、近年営業を開始した民宿はその傾向がみられる。なお、一部の民宿で夏季にヘルパーを雇っているところがあるが、民宿に併設されている食堂や喫茶店の勤務に専任または兼任している場合で、1年を通して雇用されている従業員はいない。また、一部の土地を島外の業者へ売却したケースはあるが、ホテルの建設には至っていないため、収容人数の多い宿泊施設はない。

鳩間島で、個室を提供している民宿はあるが、基本的にはバス、トイレ、洗面などの水回りは共同で、1軒の民宿のみバス、トイレ付の部屋が若干あるだけである。宿泊客は、庶民的な民宿への宿泊を好んで、または相部屋や共有施設を承知の上で、もしくはそれを望んで来島しており、鳩間島全体における民宿の形態が、客層へ大きく影響していると考えられる。

吉永・楓・谷口(2009)は、入り込み客の確保を至上命題とする観光地では、外からの視点を絶えず意識しなければならないため、お客様の好むものを模索することになり観光拠点の定番と言える一定の集客が見込める施設の建設が必要であると指摘している。鳩間島の場合、この指摘と異なり民宿はこじんまりしており、使用されていなかった古民家の利用や、別棟を建て、民家を改修するなど島民自身が建築している。鳩間島では大規模なホテル建設や、他の民宿との差別化を図るため

表3 鳩間島の観光の形態とその特徴

宿泊施設	営業開始年 年	収容人数 人	性別比率 男:女	最多年代 歳代	県外客比率 %	一人客比率 %	リピーター率 %	観光客が増加した時期	瑠璃の島放映による観光への影響	宿泊客最多時期
A	1970	15	60:40	20後半~30	98	70	80	6~7年前	鳩間島の認知度の向上	GW, 音楽祭, 豊年祭
B	1984	35	50:50	40	90	40	70	10~15年前	知名度の向上, 客の増加, 民宿の増加	GW, 7~8月
C	2001	18	40:60	30	98	70	85	分からない	客の増加	7~9月
D	2003	12	50:50	30	90	50	90	高速船の運航開始後	観光客の増加	夏
E	2006	20	50:50	若い人	95	65	80	分からない	分からない	夏
F	2006	5	50:50	若い人	95	40	50	瑠璃の島放映後	宣伝になった	夏
G	2007	15	40:60	30	97	70	80	瑠璃の島放映後 高速船の運航開始後	客の増加, 船の本数の増加, 日帰り客が増え, お金を落とさず, ゴミを落とす	GW, 8~9月
H	2008	9	60:40	30	80	40	30	瑠璃の島放映後	船の本数の増加	8月, 豊年祭
I	2010	8	40:60	30~40	90	70	30	瑠璃の島放映後	観光客の増加	GW, 7~8月
J	2012	14	70:30	30	95	80	30	分からない	船の本数の増加	GW, お盆

(筆者調査により作成)。

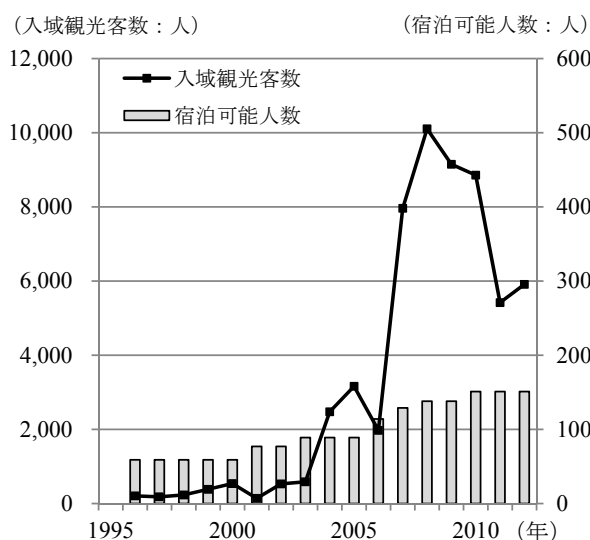


図3 鳩間島の入域観光客数と宿泊可能人数
(竹富町ホームページおよび筆者調査により作成)。

グレードをアップし、少しでも集客力を高める方向性は現状ではみられない。民宿のオーナー、料理、「ゆんたく」の楽しさ、民宿により若干異なる客層など、民宿の個性により宿泊先を選んでいる傾向がある。なお、「ゆんたく」とは、民宿のオーナーと宿泊客、時には島民も加わり、夕食時または夕食後を中心にほとんどの民宿で行われている懇親会である。

観光客が増えたため、既存の民宿だけでは対応できなくなった。新たな民宿が必要となり、民宿

が増加することによって、観光客が増えている¹¹⁾。豪華なリゾートホテル、あるいはプライベートが確保されたビジネスホテルがあれば、客層は異なると思われるが、「ゆんたく」をはじめ、旅人同士や島民との交流を求めて訪れる観光客が多いならば、現状の民宿の方がニーズにあっている。

2. 宿泊客の特徴

1) 性別・年代別宿泊客の特徴

宿泊客の性別による特徴については、「男性70%・女性30%」が1人、「男性60%・女性40%」が2人、「男性50%・女性50%」が4人、「男性40%・女性60%」が3人である。全ての民宿で宿泊者数が同一とすると、男性が51.0%で男女ほぼ同数である(表3)。

次に、利用の多い年代別宿泊客については、40歳代が1人、30歳代~40歳代が1人、30歳代が5人、20歳代後半~30歳代が1人、若い人が2人である(表3)。30歳代が多く、20歳代が必ずしも多くはない。遠隔地にあり旅費が高くつくため、比較的経済力のある30歳代が多い¹²⁾。寺阪(2009)によると、空間移動は距離の摩擦(時間距離、費用距離としての負担)による制約と観光資源の魅力度による吸引力ないし訪問頻度により大枠が描かれ、

個人にとっては、旅行に使える時間と資金の配分の問題と言えとの指摘のように、費用の負担が大きく、鳩間島を訪れる観光客は20歳代ではなく30歳代が多い。一方、寺阪（2009）の日本の現状では勤労者が長期間の休暇を取りにくいいため、多くの観光地で女性と高齢者が目立っているという指摘とは異なる結果となった。

2) 県外からの宿泊客の割合

県外からの宿泊客の割合は、98% 2人、97% 1人、95% 3人、90% 3人、80% 1人である。全ての民宿で宿泊者数が同一とすると、平均92.8%で、ほとんどが県外からの客である。その要因は、鳩間島は石垣島や西表島から距離的には近いものの、沖縄県の人口の90%以上を占める沖縄本島から訪れる場合、県外ほどではないが多くの費用と時間を要するため容易に訪れることはできず、また、沖縄県民の割合は全国の1%強で、絶対数からみても必然的に少なくなると言える。一方、営業年数の長い民宿では、仕事での利用もあるがその場合はほとんどが県内出身者である。

3) 1人で訪れる客の割合

花井（2007）は、近年の国内旅行にみられる顕著な傾向として、マスツーリズムによる周遊型観光の時代から、個人やグループによるニューツーリズムとよばれる多様で個性的な観光に移行してきていると指摘している。団体旅行の減少により個人旅行が増え、1人で訪れる客も増加傾向にある。鳩間島においては、1人で訪れる客の割合は、80%が1人、70%が4人、65%が1人、50%が1人、40%が3人（表3）である。全ての民宿で宿泊者数が同一とすると、平均59.5%で、1人で訪れる客の割合が高い。カップルや小さな子どもを連れた家族連れもおり、友人同士で訪れる割合は必ずしも高いとは言えない。なお、仕事での利用者がいる民宿では、1人で訪れる客の割合がやや低い。一方、男女別相部屋の民宿では、その割合が高い傾向がある。それが低い民宿は個室を有するかまたは繁忙期以外相部屋にしないか、1部屋の定員が2～3人で家族や友人同士で予約すると1室の定員となる。プライバシーを重視している人は、これらの民宿へ宿泊する割合が高くなる。個室を希望する

宿泊者がいる一方で、相部屋でも構わない、中には相部屋を好む者もいる。

鳩間島では、個室または相部屋にかかわらず、民宿の料金はほぼ統一されている。1泊3食付5,500円、素泊まり3,000円～4,000円が多く、定員未満で個室を希望する場合は、民宿にもよるが多少宿泊料金が割り増しになることがある。同一料金または差がほとんどないならば、個室希望者が多いと考えられるが、必ずしもそうではなく、このことから鳩間島を訪れる観光客の特徴が伺える。

4) リピーター率

リピーター率については、今回の調査は民宿のオーナーへの聞き取り調査であるため、観光客が鳩間島に再度訪れた割合ではなく、自ら経営する民宿を過去に利用したことがある客の割合について、質問を行った。各民宿へのリピーター率については、90%が1人、85%が1人、80%が3人、70%が1人、50%が1人、30%が3人である（表3）。宿泊者数が同一とすると、県外出身者がほとんどであるにもかかわらず平均62.5%と極めて高い。なお、近年営業を開始した民宿では当然それが低いものの、営業開始後半年も経っていない民宿にもリピーターがいるのは、長年営業を続けてきた民宿を第三者が引き継いでおり、オーナーが変わっても懐かしい民宿の雰囲気求めて訪れる客がいるからである¹³⁾。

面積1km²、周囲4kmにも満たない遠隔地にある小さな島で、多くの費用と時間を要する鳩間島へのリピーター率が極めて高いことは、名所旧跡を訪れる従来の観光とは異なる、新しいタイプの観光形態であると考えられる。

3. 観光客の動向

1) 観光客が増加した時期

観光客が増加した時期については、「瑠璃の島放映後」が4人、「高速船の運航開始後」が2人、「6～7年前」、「10～15年前（音楽祭の影響）」が各1人、「分からない」が3人である（複数回答有）（表3）。瑠璃の島放映後観光客が急増した結果、翌2006年から高速船が運航されたように思われがちである。しかし、鳩間島民はその前から高速船の運航を行

政に請願しており、テレビ放映の影響だけではない¹⁴⁾。10～15年前（音楽祭の影響）との回答が1人みられるように、観光客がほとんどいなかった時期に音楽祭を開始したことが、観光客の増加の一要因でもある。その他にも、運動会などの学校行事に島外から出身者や関係者だけでなく、観光客が加わることもあり、行事が盛大に行われていることも一要因である。

2) 「瑠璃の島」放映による観光への影響

瑠璃の島放映による観光への影響については、「客（観光客）の増加」が5人、「鳩間島の認知度が高くなった・宣伝になった」、「船の本数が増えた」が各3人、「民宿の増加」、「日帰り客が増え、お金を落とさずゴミを落とす」、「分からない」が各1人である（複数回答有）（表3）。「分からない」と回答したのは1人だけであるが、民宿の開業は瑠璃の島放映後であっても、鳩間島出身者か、移住者の場合はそれ以前から居住し別の仕事をしていたケースが多いからである。

鳩間島が知られるようになり、観光客が増加し、ほとんどの回答者がテレビ放映されたことを肯定的に捉えている。唯一、「日帰り客が増え、お金を落とさずゴミを落とす」が否定的な回答である。日帰りの場合、鳩間島で飲食以外にお金を使うことは少ない。集落内や近くのビーチへは徒歩で行くことができる。レンタルサイクルの利用がわずかにあるが、1日のレンタル料は500円である。

日帰り客は、個人やグループで訪れる場合だけでなく、島外からのシュノーケリングなどの日帰りツアー客が、昼の休憩に弁当持参で鳩間島に立ち寄ることが多く、ゴミ問題やトイレの無断使用が度々ある¹⁵⁾。また、島の土地の一部は1970年代に県外業者に買収されており、リゾート開発が社会問題になりつつある石垣島や西表島の現状が、対岸の火事ではなくなった。そのため、島民が検討を重ねた結果、鳩間憲章が制定され、「島の歴史と伝統文化を継承する」、「自然環境の保全に努める」、「秩序ある島の生活環境を堅持する」などを条文に掲げ、「島の土地や家屋を無秩序に売らない、貸さない」、「海産物や動植物をみだりに採取しない」といった規律を定めた¹⁶⁾。また、島の環境保

護のために集落の中心にある広場に募金箱が設置されることもあるが、寄付であるため支払は任意である。ただし、少額でもお金を納めているから島の中で自由に活動しても構わないと考えられると、結果的に島の環境を悪化させるので逆効果となる。

3) 宿泊客が多い時期

宿泊客が多い時期については、「ゴールデンウイーク」が5人、「音楽祭（5月3日）」が1人、「豊年祭」が2人、「7～8月」が2人、「夏」が3人、「7～9月」が1人、「8月」が1人、「お盆」が1人、「8～9月」が1人で、夏とゴールデンウイークに特化している（複数回答有）（表3）¹⁷⁾。鳩間島の観光の大きな魅力はプライベートビーチとなることもしばしばある透き通った海である。当然夏季の来訪者が多く、また、音楽祭、鳩間小中学校の運動会、豊年祭、ハトマの日、秋の音楽祭、結願祭などの島の行事の多くが、ゴールデンウイークから秋にかけて行われていることも大きな要因である。さらに、夏季休暇など比較的長期休暇が取りやすいこともある。ただし、夏季は台風の影響で船が欠航することが多く、天候が悪ければ入域観光客数が減少してしまう。また、図4のとおり冬季に鳩間島を訪れる観光客は極めて少ないが、海に入れないだけでなく、船の欠航率が高くそれが1週間続くこともあり、交通上の問題が大きい。

このように、鳩間島では、冬季の入域観光客数が激減する。観光関連就業者にとっては、季節による客の増減は重大な問題に思えるが、彼らの多くは農業、漁業をはじめ兼業している者が多く、また、島民自身で行っている民宿の改修、音楽活動を本格的に行っている者も複数おり、繁忙期にできないことをする期間も必要と思える。民宿が10軒あるため、事前に周知しておけば冬季の休業は問題ない。また現在、冬季の入域観光客数の増加を目指して具体的な案や対策はなく、季節による入域観光客数の差異を大きな問題とは捉えていない¹⁸⁾。

さらに、欠航が多い冬季に、観光客を誘致するのは困難である。収容人数が限られているため、問題点は大きな行事がある時、全ての民宿の予約

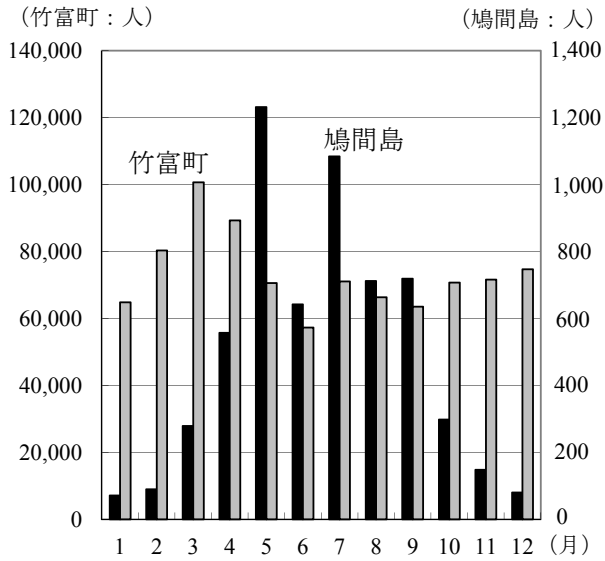


図4 鳩間島および竹富町の月別入域観光客数(2012年)
(竹富町ホームページに基づき筆者作成)。

がすぐに埋まってしまうことである。しかし、これ以上収容人数を増やすために増築しても、年間を通じての稼働率を上げることは期待できず、施設の維持と家族または1人で経営しているため、マンパワーに限界がある。

4. 観光の特徴と将来展望

1) 鳩間島の観光の特色

鳩間島の観光の特色のうち、鳩間島の魅力については、「のんびりしている・のんびりできる」が5人、「海」が4人、「見る所がない・何もなくていい」が3人、「空」が1人である(複数回答有)。具体的に観光施設を示した回答はなく、自然観光資源である「海」や「空」の回答はあったが、「のんびりしている・のんびりできる」、「見る所がない・何もなくていい」との回答にあるように、鳩間島ではあり余る時間をゆっくりくつろいで欲しいとの意見もある¹⁹⁾。具体的には、海で遊ぶ、集落および島一周の散策またはサイクリング、芝生で昼寝、朝日・夕日の観賞、星空観賞、鳩間中森見学、沖縄の三味線であるサンシンの練習、ヤシガニツアー²⁰⁾などで、鳩間中森を除くと名所旧跡巡り以外の観光で、これこそ新しいタイプの観光と言える。

2) 鳩間島の観光と今後

鳩間島の観光と今後について、大きく3分類すると、さらなる観光地化に向けての具体的な対応策、現在の環境の維持、マナーを守り迷惑をかけることである。

まず、「さらなる観光地化に向けての具体的な対応策」については、石垣新空港運航開始後の「海外からの観光客の増加に対する外国語対応」、「冬季欠航が続くので、鳩間・上原(西表島の西部の中心地)間みの運航の開始」、「観光とともに、観光以外の産業も必要」が各1人である。石垣新空港運航開始後は海外からの訪問者が増えることが予想され、年配者が新たに外国語を習得するのは困難だが、若い人が対応できるように考える必要があると指摘している²¹⁾。学校教職員以外にも若い島民が若干名いるが、語学対策の必要性の指摘はもつともである。

戸所(2010)は、群馬県伊香保温泉の観光を取り挙げ、外国人観光客に対して、過半数のホテル、旅館では何とか対応している状況で、多くの外国人客は友人や通訳などの案内者が付いてくることが多く、特にアジア各国からの観光客に対する対応を急ぐ必要があると指摘している。しかし、外国人観光客も団体客から個人客への変化が進んでおり、街全体としての対応は今後の大きな課題であると述べている。また、花井(2007)は、島の観光には脆弱な自然への配慮と総合的な保全方策が不可欠であることに注意を喚起することで、島の持続的な観光のあり方を理解し、島嶼における観光に適切に対処できる人材の育成に資するものであると述べている。これらの指摘のように、外国語対応のみならず、観光客のニーズにあったおもてなし、さらには自然保護への対応が可能な人材の育成が必要である。

次に冬季の欠航に関しては、現在は、鳩間・石垣間の欠航と同時に鳩間・上原間も欠航となる。最も波が荒れるのは鳩間・石垣間で、鳩間・上原間だけなら船の運航が可能な時もあり、その間だけでも運航されれば、島民の生活は大きく変化する。今まで台風時や冬季の欠航が続くと食料が不足する状況に陥ったが、これらが少しは解決できる²²⁾。さらに、堀本(2009)の指摘のように、観

光とともに、観光以外の産業も必要で、観光だけに頼ると、災害時や船の欠航時に多大なる損失が生じ、第1次産業を含めた産業の整備が必要であるが、農漁業ともに自家消費が中心で、流通に難があることは否めない。ただし、島内または近海の海で獲れた新鮮な食材が民宿の食事に提供されている。

また、「現在の環境の維持」については、「素朴な雰囲気を残す」、「不便を残す（余り便利でない方がよい）」、「適度な発展（発展しすぎないこと）」が各1人である。IV章で取り挙げたが、島の自然を保つためには、汚さないこと、自然保護に対する心がけ・感謝の気持ちが必要である。鳩間島の素朴さを求めて訪れる観光客が多く、多少の不便さは必要かも知れない。

最後に、「マナーを守り迷惑をかけないこと」については、「観光客も島の人もお互い迷惑をかけない」、「マナーを守って欲しい（水着で歩かない）」が各1人である。島外からのツアー客によるゴミのポイ捨て、公民館のトイレの無断使用など、環境の悪化が指摘されているが、マナーを守っていく気持ちが大切である。

VI まとめ

テレビドラマの影響で、急激に観光地化し、鳩間島民の生活スタイルは一変した。民宿や船便が増え、島は以前より活気づいている。農業から民宿経営に仕事を変える者、Uターンして民宿や喫茶店を始める者など、観光客の利用の多い業務に従事する者が増加し、今日では観光が島の主産業である。

また、観光関連業務に就く者に加え、売店や郵便局の利用も増加したが、それ以外の者には、入域観光客数が増加してもメリットは少なく、環境の悪化などデメリットの指摘もある。

ところで、鳩間島の観光の特色は、リピーターが多いこと、ほとんどが県外からの観光客で1人旅が多く、30歳代の人最も多い。鳩間島での過ごし方は、海で遊ぶ、集落および島一周の散策またはサイクリング、芝生で昼寝、朝日・夕日の観賞、星空観賞、鳩間中森見学、サンシンの練習、「ゆんたく」などをあげることができる。これらの中で、

1人でできないことは、「ゆんたく」だけである。昼間は散策やビーチでのんびりし、夜は島民も加わり、民宿の庭でサンシン片手に島の文化に触れつつ、明りを落とせば都心では見ることができない星空をバックに語り合う非日常的空間は、鳩間島観光の大きな魅力と言える。

名所旧跡は少なく、遠隔地で船の欠航が多いにもかかわらず、鳩間島が観光地化した背景には豊かな自然に加え、のんびりと過ごすことのできる空間があり、さらに島民やリピーターを含めた旅人との触れ合いも、鳩間島の重要な観光のあり方と言える。

本研究を行うにあたり、突然の訪問にもかかわらず、鳩間島の多くの方に調査にご協力いただき深く感謝いたします。多くの方から、調査項目に加え、島の歴史や近年の社会変容、島の産業などを含め貴重なお話を聞かせていただき、重ねて御礼申し上げます。最後になりましたが、終始きめ細かなご指導をいただきました琉球大学名誉教授の島袋伸三先生に御礼申し上げます。なお、本研究の骨子は、2012年度法政大学地理学術大会および2013年日本地理学会春季学術大会離島地域研究グループで発表した。

(受付 2013年6月19日)

(受理 2013年6月30日)

注

- 1) 3度の廃校の危機については、堀本(2010)に詳しく記されている。
- 2) 鳩間島の海浜留学生については、堀本(2009)、堀本(2010)を参照されたい。
- 3) 筆者が鳩間島で出会った人との会話の中から得た情報であり、具体的な調査に基づくものではない。
- 4) 筆者は、鳩間・石垣間より、さらに船の欠航率が高い波照間・石垣間の欠航により、当初波照間島を訪れる予定を、急遽鳩間島へ変更した旅行者に何人も出会った。
- 5) 鳩間島民A氏による(2007年7月)。
- 6) 小濱(1996)による。
- 7) 森口(1999)による。例年3月末に教職員の転勤や海浜留学生の卒業や転校により、4月初めに教職員や海浜留学生の転入があるまで、一時的に人口が減少する。
- 8) 森口(2005)による。戦後に限ってみても、大型台風と大干ばつ襲来等多くの被害を受けている。調査開始後も、

台風による家屋の一部倒壊や、学校の体育館の窓ガラスが割れるなどの被害が続いた。さらに、欠航による宿泊客のキャンセルなど多くの損失があった。また、台風対策と片付けに要する労力も並大抵ではない。

- 9) 本稿では、住民票の有無にかかわらず主たる居住地が鳩間島の場合を居住者とした。住民票を鳩間島においたまま島外で居住している人や夏季のみ居住している民宿のヘルパーは、居住者に含んでいない。一方、仮に住民票が鳩間島になくても主たる居住地が鳩間島の場合は居住者とした。
- 10) 島内に食堂がなかったため、民宿は3食付が基本であったが、食堂の開店により素泊まり民宿の営業が可能となり、2012年8月現在5軒ある。そのうち3軒は、民宿に併設して食堂があり、宿泊者以外も利用できる。その他の素泊まり民宿は、食事の世話がないうえに負担が少なく、食堂にとっても日帰り客以外に、他の素泊まり民宿の客の利用が見込まれ、相乗効果がある。観光客が増加しはじめた頃、高齢の夫婦が帰島し素泊まり民宿の営業を開始したが、複数の食堂ができたため可能となった。
- 11) 鳩間島民B氏による(2012年8月)。
- 12) 鳩間島民C氏による(2012年8月)。
- 13) 鳩間島民D氏による(2012年8月)。
- 14) 前掲11)B氏による(2012年8月)。
- 15) 前掲11)B氏による(2007年9月)。
- 16) 沖縄タイムスによる(2007年4月17日掲載)。
- 17) 毎年5月3日に開催される鳩間島音楽祭には1,000人を超える来島者があり、宿泊客は、来年の予約をして帰る人が多い。島内の民宿の総収容人数は150人程度で、1年先まで予約をしておかないと、1年間で最も混雑する5月の音楽祭の前後に宿泊することは容易ではない。なお、日帰り客に対して、当日は臨時便を運航し対応している(鳩間島民E氏による:2010年9月)。
- 18) 鳩間島民F氏による(2012年8月)。
- 19) 前掲12)C氏による(2010年9月)。
- 20) ヤシガニツアーは、ヤシガニを捕獲しやすい深夜に行われる。宿泊者の有志に島民が同行して行われることが多く、軍手などの準備とヤシガニの捕獲の際に危険を伴うため、熟練者の引率が必要である(鳩間島民G氏による:2012年8月)。また、ヤシガニ保護のため、握りこぶしより小さいものは捕獲してはならないルールがある(鳩間島民H氏による:2007年7月)。
- 21) 前掲11)B氏による(2012年8月)。なお、石垣新空港運航開始後の入域観光客数の変化については、現時点では十分なデータがなく、今後の課題としたい。
- 22) 大原(西表島東部の中心地)・石垣間は、船が欠航することが少なく、鳩間・石垣間が欠航した時は石垣から大

原まで船で行き、大原からバスで上原まで移動することが可能である。ただし、鳩間・上原間は、鳩間・石垣間の欠航と同時に運航されないため、備船に頼らざるを得ない。

文献

- 伊波美智子(2008):「光と風のマーケティング—沖縄観光のイメージとメッセージ—」琉球大学(編)『やわらかい南の学と思想—琉球大学の知への誘い—』沖縄タイムス社, 228-235.
- 梅村哲夫(2007):「沖縄県入域観光客に関するグラビティーモデル分析の再推計」琉球大学観光科学創刊号, 45-54.
- 海津ゆりえ・真坂昭夫(2006):「島嶼における住民参加による自律的観光を通じた地域活性化と発展モデルの研究」京都嵯峨芸術大学紀要, 31, 21-28.
- 小濱光次郎(1996):『鳩間島追想』小濱光次郎, 238p.
- 須田寛(2009):『新産業観光』交通新聞社, 301p.
- 寺阪昭信(2009):『大学テキスト 観光地理学—世界と日本の都市と観光—』古今書院, 123p.
- 戸所隆(2010):『観光集落の再生と創生—温泉・文化景観再考—』海青社, 201p.
- 花井正光(2007):「持続可能な観光と琉球大学観光科学科のカリキュラムおよび環境関連科目について」琉球大学観光科学創刊号, 151-158.
- 花井正光(2008):「ニューツーリズムと沖縄の自然—新たな人と自然のかかわりに期待する—」琉球大学(編):『やわらかい南の学と思想—琉球大学の知への誘い—』沖縄タイムス社, 218-227.
- 保母武彦(1996):『内発的発展論と日本の農山村』岩波書店, 271p.
- 堀本雅章(2009):「小規模離島における学校の役割と住民意識—沖縄県竹富町鳩間島の事例—」沖縄地理, 9, 13-26.
- 堀本雅章(2010):「沖縄県竹富町鳩間島における学校の役割と住民意識」平岡昭利編著『離島研究IV』海青社, 193-205.
- 森口 裕(1999):『沖縄近い昔の旅 非武の島の記憶』凱風社, 296p.
- 森口 裕(2005):『子乞い 沖縄孤島の歳月』凱風社, 269p.
- 山村順次(2012):『観光地理学—観光地域の形成と課題—』同文館出版, 173p.
- 吉永淑雄・楓 森博・谷口知司(2009):「観光地の景観地理学的考察(I)—地域の良好な景観育成および観光資源としての役割について—」岐阜女子大学紀要, 38, 61-68.